

スギ・ヒノキ科花粉症飛散量と咽喉頭症状

村嶋智明 伊藤周史 三村英也 内藤健晴
藤田保健衛生大学医学部耳鼻咽喉科学教室

スギ・ヒノキ花粉症の咽喉頭症状についての研究は未だ不十分である。今回、我々はスギ・ヒノキ科花粉の大量飛散年(2005年)と少量飛散年(2010年)におけるスギ・ヒノキ科花粉症患者の咽喉頭症状について比較検討したので報告する。

スギ・ヒノキ科花粉の飛散期中に当科および当科の関連病院を受診したスギ・ヒノキ科花粉症患者、大量飛散年23名、少量飛散年13名を対象とした。オロパタジン塩酸塩を内服させ、治療開始の時期から初期治療群、飛散後治療群に分け、咽喉頭症状である咳嗽咽喉頭異常感、後鼻漏のそれぞれの症状について問診および花粉症日記を用いて記録し、そのスコアを集計し観察、検討した。

初期治療群において咽喉頭症状のうち咳嗽、咽喉頭異常感については大量飛散年の方が有意に症状が抑制された。花粉の飛散量に関わらず、いずれの咽喉頭症状の出現頻度も高いことが示唆された。大量飛散年において咳嗽、咽喉頭異常感、後鼻漏のそれぞれの症状について相関関係が認められた。一方で少量飛散年では相関関係は認められなかった。